

水鬼

岡本綺堂

青空文庫

A君——見たところはもう四十近い紳士であるが、ひどく元気のいい学生肌の人物で、「野人、礼にならわす。はなはだ失礼ではありますが……。」と、いうような前置きをした上で、すこぶる軽快な弁舌で次のごとき怪談を説きはじめた。

僕の郷里は九州で、かの不知火しらぬいの名所に近いところだ。僕の生れた町には川らしい川もないが、町から一里ほど離れた在ざいに入ると、その村はずれには尾花川おばなというのがある。ほんとうの名を唐と

うじん
人川というのだそうだが、土地の者はみな尾花川と呼んでいる。
なぜ唐人川というのか、僕もよく知らなかったが、昔は川の堤どてに
芒すすきが一面に生おい茂もっていたというから、尾花川の名はおそらくそ
れから出たのだろうと思われる。もちろん大抵の田舎の川はそう
だろうが、その川の堤にも昔の名残りをとどめて、今でも芒が相
当に茂っているのを、僕も子供のときから知っていた。

長い川だが、川幅は約二十間けんで、まず隅田川の四分の一ぐらい
だろう。むかしから堤が低く、地面と水との距離がいたって近い
ので、ややもすると堤を越えて出水する。僕の子供のときには四
年もつづいて出水したことがあった。いや、これから話そうとす
るのは、そんな遠い昔のことじゃあない。といて、きのう今日

の出来事ではない、僕の学生時代、今から十五六年前のことだと
思いたまえ。

そのころ僕は東京に出ていたのだが、その年にかぎって学校の
夏休みを過ぎてもやはり郷里に残っていた。そのわけはだんだん
に話すが、まず僕が夏休みで帰郷したのは忘れもしない七月の十
二日で、僕の生れた町は停車場から三里余りも離れている。この
頃は乗合自動車が通うようになったが、その時代にはがたくりの
乗合馬車があるばかりだ。人力車もあるが、僕はさしたる荷物が
あるわけではなし、第一に値段がよほど違うので、停車場に降り
るとすぐに乗合馬車に乗込んだ。

汽車の時間の都合がわるいので、汽車を降りたのは午後一時、

ちようど日ざかりで遣りきれないと思つたが、日の暮れるまでこんな所にぼんやりしている訳にもいかないので、汗をふきながら乗合馬車に乗込むと、定員八人という車台のなかに僕をあわせて乗客はわずかに三人、ふだんから乗り降りの少ないさびしい駅である上に、土地の人は人力車にも馬車にも乗らないで、みんな重い荷物を引つかついですたすた歩いて行くというふうだから、大抵の場合には馬車満員ということのないのは僕もかねて承知していたが、それにしても三人はあまりに少な過ぎる。しかしまあ少ない方に間違つているのは結構、殊に暑いときには至極結構だと思つて、僕は楽々と一方の腰掛けを占領していると、向う側に腰をおろしているのは、僕とおなじ年頃かと思われる二十四五の男

と、十九か二十歳はたちぐらいの若い女で、その顔付きから察するに彼等はたしかに兄きょうだい妹いらしく見られた。

ここで僕の注意をひいたのは、この兄妹の風俗の全然相違していることで、兄は一見して質朴な農家の青年であることを認められるにもかかわらず、妹は媚なまめかしい派手づくりで、僕等の町でみる酌婦などよりは遥かに高等、おそらく何処かの芸妓であろうと想像されることであつた。兄も妹もだまつていた。兄はときどきに振り向いて車の外をながめたりしていたが、妹は顔の色の蒼ざめた、元氣のないようなふうで、始終うつむいて自分の膝の上で眼をおとしていた。僕は汽車のなかで買った大阪の新聞や地方新聞などを読んでいるうちに、馬車は停車場から町のまん中をつき

ぬけて、やがて村へはいつて行つた。前にもいう通り、僕の町へ行き着くにはこの田舎路を三里あまりもがたくつて行かなければならないのだから、暑い時にはまつたく難儀だ。

それでも長い汽車旅行と暑さとに疲れているので、僕はそのがた馬車にゆられて新聞をよみながらいつとはなしにうとうとと眠つてしまつたと思うと、不意にぐらりと激しく揺すぶられたので、はっと驚いて眼をあくと、僕のからだは腰掛けから半分ほど転げかかっている。向う側の女もあやうく転げそうになつたのを、となりにいる兄貴に抱きとめられてまず無事という始末。一体どうしたのかと見まわすと、われわれの乗っている馬車馬が突然に倒れたのだ。つまり動物虐待の結果だね。碌々に物も食わせないで、

この炎天に馱者の鞭で残酷に引っぱたかれるのだから助からない。馬は途中で倒れてしまったというわけだ。

馱者も困って馱者台から飛び降りた。われわれもひとまず車から出る。馱者はもちろん、かの青年も僕も手伝って、近所の農家の井戸から冷たい水を汲んで来て、馬に飲ませる、馬のからだにぶっかける。馱者は心得ているので、どこからか荒むしろのようなものを貰って来て、馬の背中に着せてやる。そんなことをして騒いでいるうちに、馬はどうかこうにか再び起き上がったので、涼しい木のかげへ引き込んでしばらく休ませてやる。われわれも汗をふいてまずひと息つくという段になると、かの青年は俄かにあつと叫んだ。

「畜生。また逃げたか。」

誰が逃げたのかと思つて見かえると、かの芸妓らしい女がいつの間にか姿をかくしたのだ。われわれが馬の介抱に気をとられて、夢中になつて騒いでいるうちに、彼女は何処へか消え失せてしまつたらしい。なぜ逃げたのか、なぜ隠れたのか、僕には勿論わからなかつたが、青年は一種悲痛のような顔色をみせて舌打ちした。そうして、これからどうしようかと思案しているらしかつたが、やがて馭者にむかつてきいた。

「どうだね。この馬はあるけるかね。」

「すこし休ませたら大丈夫だろうと思つが……。」と、馭者は考えながら言った。「だが、こいつもこのごろは馬鹿に足が弱くな

ったからね。」

再び乗り出して、また途中で倒れられては困ると僕は思った。青年もやはりその不安を感じたらしく、自分はいっそれから歩くと言い出した。そうして、馭者と談判の結果、馬車賃の半額を取戻すことになった。まだ一里ほども来ないのに、半額では少し割が悪いと思つたが、これは災難で両損とあきらめるよりほかはない。僕も半額を受取つて、カバンひとつを引っさげて歩き出すと、青年も一緒に列んで歩いて来た。こうなると僕も彼と道連れにならないわけには行かない。僕は歩きながら訊きいた。

「あなたは何処までおいでです。」

「KBの村までまいります。」と、かれは丁寧ていねいに、しかもはつき

りと答えた。

「じゃあ、おなじ道ですね。僕はMKの町まで帰るのです。」

こんなことからだんだんに話し合つて、僕がMKの町の秋坂のせがれであるということが判ると、青年は更にその態度をあらためて、いよいよその挨拶が丁寧になった。僕の家は別に大家たいけといふのではないが、なにしろ土地では屈指の旧家になっているので、かれも秋坂の名を知っていて、そのせがれの僕に対して相当の敬意を表することになったらしい。彼は小さい風呂敷包み一つを持っているだけで、ほとんど手ぶら同様だ。僕もカバンひとつだが、そのなかには着物がぎつしりと詰め込んであるので見るから重そうだ。かれは僕がしきりに辞退するにもかかわらず、とうとう僕

のカバンをさげて行つてくれることになった。

青年はもちろん健脚らしく、僕も足の弱い方ではないが、なにしろ七月の日盛りに土の焼けた、草いきれのする田舎道をてくるのだからたまらない。ふたりは時々木の下に休んだりして、午後五時に近い頃にようやく僕の町の姿を見ることになった。

二

東京の人たちは地方の事情をよく御存知あるまいが、僕たちの学生時代に最もうるさく感じたのは、毎年の夏休みに帰省きせいするところだ。帰省を嫌うわけではないが、帰省すると親類や知人のところ

ろへぜひ一度は顔出しをしなければならぬ。それも一度ですむのはまだいいが、相手によつては二度三度、あるいは泊まって来なければならぬというようなどころもある。それも町のうちだけではない。隣り村へ行く、またその隣り村へ行く。甚だしいのになると、山越しをして六里も七里も行くというのだから、全くやりきれない。この時にも勿論それを繰返さなければならなかつたので、七月いっぱいにはほとんど忙がしく暮らしてしまつた。

八月になつて、まずその役目もひと通りすませて、はじめて自分のからだになつたような気がしたが、毎日ただ寝ころんでいても面白くない。帰省中に勉強するつもりで、いろいろの書物をさげて来たのだが、いざとなるとやはりいつもの怠け癖が出る。と

いって、なにぶんにも狭い町だから遊びに行くような場所もない。いつそ釣りにでも行ってみようかと思ひ立つて、八月なかばの涼しい日に、家の釣道具を持出してかの尾花川へ魚釣りに出かけた。もちろん、日中に釣れそうもないのは判っているので、僕は昼寝から起きて顔を洗って、午後四時ごろから出かけたのだ。町から一里ほど歩いて、このごろの日はまだ暮れそうにも見えない。子供の時からたびたび来ているので、僕もこの川筋の釣り場所は大抵心得ているから、堤の芒をかきわけて適当なところに陣取つて、向う岸の櫛はじの並木が夕日にいろどられているのを眺めながら、悠々と糸を垂れはじめた。

前置きが少し長くなったが、話の本文はいよいよこれからだと

思いたまえ。

子どもの時からあまり上手でもなかったが、年を取ってからいよいよ下手になったとみえて、小一時間も糸をおろしていたが一向に釣れない。すこし飽きて来て、もう浮木うきの方へは眼もくれず、足もとに乱れて咲いている草の花などをながめているうちに、ふと或る小さい花が水の上に漂ただよっているを見つけた。僕の土地ではそれを幽霊藻とか幽霊草とかいうのだ。普通の幽霊草というのは曼珠沙華まんじゆしやげのことで、墓場などの暗い湿しめっぽいところに多く咲いているので、幽霊草とか幽霊花とかいう名を付けられたのだが、ここらでいう幽霊藻はまったくそれとは別種のもので、水のまにまに漂っている一種の藻のような浮き草だ。なんでも夏の初めか

ら秋の中ごろへかけて、水の上にこの花の姿をみることが多いよ
うだ。雪のふるなかでも咲いているというが、それはどうも嘘ら
しい。

なぜそれに幽霊という名を冠かぶらせたかというところ、所詮しよせんはその
花と葉との形から来たらしい。花は薄白と薄むらさきの二種あつ
て、どれもなんだか曇つたような色をしている。ことにその葉の
形がよくない。細い青白い長い葉で、なんだか水のなかから手を
あげて招いているようにも見える。そういうわけで、花といい、
葉といい、どうも感じのよくない植物であるから、いつの代よから
か幽霊藻とか幽霊草とかいう忌いやな名を付けられたのだろうと想像
されるが、それについては又こういう伝説がある。

昔、平家の美しい官女が壇ノ浦から落ちのびて、この村まで遠く迷つてくると、ひどく疲れて喉が渴いたので、堤から這い降りて川の水をすくって飲むうとする時、あやまって足をすべらせて、そのまま水の底に吸い込まれてしまった。どうしてそれが平家の官女だということが判ったか知らないが、ともかくそういうことになっている。そうして、それから後にこの川へ浮き出したのがあの幽霊藻で、薄白い花はかの女の小袖の色、うす紫はかの女の袴の色だというのだ。官女の袴ならば緋でありそうなものだが、これは薄紫であったということだ。哀れな女のたましいを草花に宿らせたような伝説は諸国にたくさんある。これもその一例であるらしい。

聊齋志異りようさいしいの水莽草すいもうそうとは違つて、この幽霊藻は毒草ではないといふことだ。しかしそれが毒草以上に恐れられているのは、その花が若い女の肌に触れると、その女はきつと祟たられるという伝説があるからだ。したがつて、男にとつてはなんの関係もない、単に一種の水草に過ぎないのだが、それでも幽霊などという名が付いている以上、やはりいい心持はしないとみえて、僕たちがこの川で泳いだり釣つたりしている時に、この草の漂つているのを見つけると、それ幽霊が出たなぞと言つて、人を嚇かしたり、自分が逃げたり、いろいろに騒ぎまわつたものだ。

今の僕は勿論そんな子供らしい料簡りようけんにもなれなかつたが、それでも幽霊藻——久しぶりで見た幽霊藻——それが暮れかかる

水の上にぼんやりと浮かんでいるのを見つけた時に、それからそれへと少年当時の追憶が呼び起されて、僕はしばらく夢のようにその花をながめていると、耳のそばで不意にがさがさいう音がきこえたので、僕も気がついて見かえると、僕のしゃがんでいる所から三間げんとは離れない芒すすきむら叢をかきわけて、一人の若い男が顔を出した。彼は白地の飛白かすりの単衣ひとえものを着て、麦わら帽子をかぶっていた。

かれも僕も顔を見合せると、同時に挨拶した。

「やあ。」

若い男は僕の町の薬屋のせがれで、福岡か熊本あたりで薬剤師の免状を取って来て、自分の店で調剤もしている。その名は市野

弥吉といって、やはり僕と同年のはずだ。両親もまだ達者で、小僧をひとり使つて、店は相当に繁昌しているらしい。僕の小学校友達で、子どもの時には一緒にこの川へ泳ぎに来たこともたびたびある。それでもお互いに年が長^たけて、たまたまこうして顔をあわせると、両方の挨拶も自然に行儀正しくなるものだ。ことに市野は客商売であるだけに如^{じよさい}才がない。かれは丁寧^{じやうぜい}に声をかけた。「釣りですか。」

「はあ。しかしどうも釣れませんよ。」と、僕は笑いながら答えた。

「そうでしょう。」と、彼も笑つた。「近年はだんだんに釣れなくなりましたよ。しかし夜釣りをやったら、鰻が釣れましょう。」

どうかすると、非常に大きい鱸すずきが引つかかることもあるんですが

……」

「すずきが相変らず釣れますか。退屈しのぎに来たのだからどうでもいいようなものの、やっぱり釣れないと面白くありませんね。」

「そりやそうですとも……。」

「あなたも釣りですか。」と、僕は訊いた。

「いいえ。」と、言っただばかりで、彼はすこしく返事に困っているらしかったが、やがてまた笑いながら言った。「虫を捕りに来たんですよ。」

「虫を……。」

「近所の子供にもやり、自分の家にも飼おうと思つて、きりぎりすを捕りに来たんです。まあ、半分は涼みがてらに……。あなた
の釣りと同じことですよ。」

きりぎりすを捕るだけの目的ならば、わざわざここまで来ないでも、もつと近いところにくらでも草原はあるはずだと僕は思つた。勿論、涼みがてらというならば格別であるが、それにしても彼は虫を捕るべき何の器械をも持っていない。網も袋も籠も用意していないらしい。すこし変だと思つたが、僕にとつてはそれが大した問題でもないから、深くは気にも留めないでいると、市野は芒をかきわけて僕のそばへ近寄つて来た。

「そこに浮いているのは幽霊藻じゃありませんか。」

「幽霊藻ですよ。」と、僕は水のうえを指さした。「今じゃあ怖がる者もないでしょうね。」

「ええ、われわれの子どもの時と違って、この頃じゃあ幽霊藻を怖がる者もだんだんに少なくなつたようですよ。しかしほかの土地にはめつたにない植物だとかいって、去年も九州大学の人たちが来てわざわざ採集して行つたようですが、それからどうしましたか。」

「これが貴重な薬草だということが発見されるといいんですがね。」と、僕は笑つた。

「そうなるとしめたものですが……。」と、彼も笑つた。

それからふた言三言話しているうちに、彼はにわかにながつい

たようにうしろを見かえった。

「いや、どうもお妨げをしました。まあ、たくさんお釣りなさい。」

市野は低い堤をあがって行った。水の上はまだ明るいが、芒の多い堤の上はもう薄暗く暮れかかっている。僕は何心なく見かえると、その芒の葉がくれに二つの白い影がみえた。ひとつは市野に相違なかったが、もう一つの白い影は誰だか判らない。しかしそれが女であることは、うしろ姿でもたしかに判った。

虫を捕りに来たなどというのは嘘の皮で、市野はここで女を待合せていたのかと、僕はひとりではほえんだ。それと同時に、このあいだ乗合馬車から姿をかくしたあの芸妓のことがふと僕のあ

たまに浮かんだ。夕方もうす暗いときに、ただそのうしろ姿を遠目に見ただけで、市野の相手がどんな女であるか、もちろん判らうはずはないのだが、不思議にその女がああ芸妓らしく思われてならなかった。なぜそう思われたのか、それは僕自身にも判らない。

市野は別に親友というのでもないから、彼がどんな女にどんな関係があろうとも、僕にとっては何でもないことであるが、相手の女が果してあの芸妓であるとする、僕はすこし考えなければならなかった。

このあいだ僕が道連れになった青年は、この川沿いのKB村の勝田良次という男で、本来は農家であるが、店では少しばかりの荒物を売り、その傍らには店のさきに二脚ほどの床しょうぎ几をならべて、駄菓子や果物やパンなどを食わせる休み茶屋のようなこともしているのだ。

「いつそ農一方でやっていく方がいいのですが、祖父の代から荒物屋だの休み茶屋だの、いろいろの片商売をはじめたので、今さら止めるわけにも行かず、却ってうるさくて困ります。それがために妹までが碌でもない者になってしまいました。」と、かれは僕のカバンをさげて歩きながら話した。

店でいろいろの商売をしているので、妹のおむつは小学校に通っている頃から、店の手伝いをして荒物を売ったり、客に茶を出したりしているうちに、誰かにそそのかされたとみえて、十四の秋になって何処へか奉公に出たいと言ひ出した。勝田の家は母のお種と総領の良次、妹のおむつと弟の達三の四人ぐらしで、良次と達三は田や畑の方を働き、店の方はお種とおむつが受持つているのであるから、ひとりでも人が欠けては手不足を感じるので、母も兄弟もおむつを外へ出すことを好まなかつた。家じゅうが総反対で、とても自分の目的は達せられないと見て、おむつは無断で姿をかくした。

「そのときは心配しましたよ。」と、良次は今更のように嘆息し

た。「それから手分けをして、妹の行くえを探しましたが、なかなか知れません。とうとう警察の手をかりて、その翌年の三月になつて、初めて妹の居どころが判つたのですが……。妹は熊本に近いある町の料理屋へ酌婦に住み込んでいたのです。わたくしはすぐに駈けつけて、その前借金を償^{つぐな}つて、一旦実家へ連れて歸つたのですが、ふた月三月はおとなしくしているかと思つたとまた飛び出す。その都度^{つど}に探して歩く。連れて歸る。そんなことがたびたび重なるので、母もわたくしももう諦めてしまつて、どうとも勝手にしろと打ちちゃつて置くと、五年あまりも音信不通で、どこにどうしているかよく判りませんでした。

それが今年の六月の末になつて、突然に手紙をよこしまして、

自分は門司もじに芸妓をしているが、この頃はからだが悪くて困るから、しばらく実家へ帰って養生をしたいと思う。ついては兄さんかおつ母さんが出て来て、抱え主にそのわけを話してもらいたいというのです。からだが悪いと聞いてはそのままにもしておかないので、母とも相談の上で、今度はわたくしが門司まで出かけて行きまして、抱え主にもいろいろ交渉して、ともかくもひとまず妹を連れてくることにして、きょうこの停車場へ着いて、あなたと同じ馬車で帰る途中、御承知の通りの始末で、どこへか消えてしまったのです。実に仕様のない奴で、親泣かせ、兄弟泣かせ、なんともお話になりません。家にいたときは三味線の持ちようも知らない奴でしたが、方々を流れあるいているうちに、どこでど

う習ったのか、今では曲りなりにも芸妓をして、昔とはまるで変わった人間になつて居るのです。」

それにしても、ここまで自分と一緒に帰つて来て、なぜ再び姿を隠したのか、その理屈がわからないと良次は言つた。僕にもちよつと想像が付かなかつた。そのうちに僕の町へ行き着いたので、僕はカバンを持つてくれた札をいつて、氣の毒な兄と別れた。

その後、その妹はどうしたか、僕も深く詮議するほどの興味を持たなかつたので、ついそのまま過ぎていたのだが、いま偶然にその人らしい姿を見つけて、しかもそれが市野と連れ立つて行くのをみたので、僕もすこし考えさせられた。

しかし、わざわざ彼等のあとを尾^つけて行つて、それを確かめる

程の好奇心も湧き出さなかつたので、僕は再び水の方に向き直つて自分の釣りに取りかかったが、市野の言つたような大きいすずきは勿論のこと、小ぎかな一匹もかからないので、僕ももう忍耐力をうしなつた。

「帰ろう、帰ろう。つまらない。」

ひとりごとを言いながら釣道具をしまった。宵闇の長い堤をぶらぶら戻つてくると、僕をじらすように大きい魚の跳ねあがる音が暗い水の上で幾たびかきこえた。そこらの草のなかには虫の聲が一面にきこえる。東京はまだ土用が明けたばかりであろうが、ここらは南の国といつてもやはり秋が早く来ると思いながら、か
らっぽうの魚籠びくをさげて帰つた。いや、帰つたといつても、よう

よう半道ばかりで、その辺から川筋はよほど曲っていくので、僕は堤の芒にわかれを告げて、堤下の路を真っ直ぐにあるき出すと、暗いなかから幽霊のようにふらふらと現われたものがある。思わず立ちどまって窺ってみると、この暗やみでどうして判ったのか知らないが、その人は低い声で言った。

「秋坂さんじゃございませんか。」

それは若い女の声であった。

尾花川の堤にはときどきに狐が出るなどというが、まさかそうでもあるまいと多寡たかをくくつて、僕は大胆に答えた。

「そうです。僕は秋坂です。」

幽霊か狐のような女は、僕のそばへ近寄って来た。

「先日はどうも失礼をいたしました。」

暗いなかで顔かたちはわからないが、僕ももう大抵の鑑定は付いた。

「あなたは勝田の妹さんですか。」

「そうでございます。」

果して彼女は勝田良次の妹の芸妓であつた。と思う間もなく、女はまた言った。

「あなたはこれから町の方へお帰りでございますか。」

「はあ。これから家^{うち}へ帰ります。」

「では、御一緒にお供させていただけますまいか。わたくしも町の方まで参りたいのですが。」と、女は僕の方へいよいよ摺り寄

つて来た。

いやだともいえないのと、この女から何かの秘密を聞き出してやりたいというような興味もまじって、僕は彼女と列んで歩き出した。

「あなたは前から市野さんを御存じですか。」と、女は訊いた。

市野と一緒にあるいていたのは、この女であったことがいよいよ確かめられた。それからだんだん話してみると、この女も芒のかげに忍んでいて、市野と僕との会話をぬすみ聞いていたらしかった。そうして、僕が秋坂という人間であることを市野の口から教えられたらしかつた。さもなければ、彼女が僕の名を知っているはずがない。いずれにしても、僕は子どもの時から市野を知つ

ていると正直に答えた。しかし自分は近年東京に出ていて、彼と一年に一度会うぐらいのことであるから、その近状についてはなんにも知らないと、あらかじめ一種の予防線を張っておいた。

「今夜もこれから市野君のところへ行くんですか。」と、僕は空とぼけて訊いた。

「実はもう少し前まで一緒にいたんですが……。もう今頃は死んでしまったでしょう。」

僕もおどろいた。なにぶんにも暗いので、彼女がどんな顔をしているか、どんな姿をしているか、もちろん判断は付かないのであるが、平気でそんなことを言っているのを見ると、おそらく発狂でもしているのではないかと疑っていると、相手はまた冷やか

に言った。

「わたくしはこれから警察へ行くんですよ。」

「なにしに行くんです。」

「だって、あなた。人間ひとり殺して平気でもいられますまい。」

相手もおちついていて、僕はだんだんに薄気味わるくなつて来た。どうしてもこの女は氣違いらしい。不意に白い齒をむき出して僕に飛びかかってくるようなことがないとも限らないと思つたが、今さら逃げ出すことも出来ないのです。僕はよほど警戒しながら一緒にあるいた。こう言つたら、臆病とか弱虫だと笑うかも知れないが、人通りの絶えた田舎路をこんな女と道連れにな

って行くのは決して愉快なものではない。せめて月明かりでもあるといいのだが、あいにくに今夜は闇だ。

「じゃあ、あなたはほんとうに市野君を殺したんですか。」と、僕は念を押して訊いてみた。

「かみそり剃刀で喉を突いて、川のなかへ突き落したんですから、たしかに死んでいると思います。わたくしはこれから警察へ自首しに行くんです。」

「冗談でしょう。」と、僕は大いに勇氣を出したつもりで、わざとらしく笑った。

「知らないかたは冗談だと仰しやるかも知れませんが、それが冗談かほんとうか、あしたになれば判ります。わたくしは市野

という男を殺すために、今度故郷へ帰ってくるようになったのかも知れません。」

僕は又ぎよつとした。

「あなたはなんにも御存じないでしょうから、だしぬけにこんなことを言うと、定めて冗談か、それとも気でも違っているかとお思いなさるでしょうが……。」と、相手はこっちの肚はらのなかを見透したようにまた言った。「けれども、それはほんとうのことなんです。このあいだ、兄と一緒にお帰りになったそうですが、そのときに兄がわたくしのことについて、なにかお話をしましたか。」

「はあ、少しばかり聞きました。あなたは門司の方に行っていた

「それで……。」と、僕も正直に答えた。

女はすこし考えているらしかったが、やがてまたしずかに話し出した。

「あの市野という男は、わたくしに取っては一生のかたきなんです。殺すのも無理はないでしょう。」

僕はだまつて聞いていた。

四

路ばたの草むらから螢が一匹とび出して、どこへか消えるように流れて行った。ここらの螢は大きい。それでも秋の影のうすく

痩せているのが寂しくみえるので、僕もなんだか薄暗いような心持で見送っていると、女もその蛍のゆくえをじつと眺めているらしかつた。

「なんだか人魂ひとたまのようですね。」と、女は言った。そうして、

また歩きながら話しつづけた。「兄からお聞きになっっているなら、大抵のことはもう御承知でしょうが、わたくしは今年二十歳はたちですから、あしかけ七年前、わたくしが十四とじの歳でした。市野さんはこの川へたびたび釣りに来て、その途中わたくしの店へ寄って煙草やマツチなんぞを買って行くことがありました。時々には床几に休んで、梨や真桑瓜まくわうりなんぞを食べて行くこともありました。

そのころ市野さんは十九でしたが、わたくしは十四の小娘でまだ

色気も何もありません。唯たびたび逢っているの、自然おたがいが懇意になつていたというだけのことでしたが、ある日のこと、やっぱり今時分でした。市野さんが釣りの帰りにいつもの通りわたくしの店へ寄つて、お茶を飲んだり塩煎餅をたべたりした時に、わたくしが何ごころなく傍へ行つて、きようはたくさん釣れましたかと聞くと、市野さんは笑いながら、いや今日は不思議になんにも釣れなかつた。この通り魚籠びくは空からだが、しかしこんなものを取つて来たといつて、魚籠のなかから何か草のようなものを掴み出してみせたので、わたくしもうっかり覗いてみますと、それは川に浮いている幽霊藻なんです。あなたも御存知でしょう、幽霊藻を……。」

「幽霊藻……。知っています。」と僕は暗いなかでうなずいた。

「あらいやだと思つて、わたくしは思わず身をひこうとすると、

市野さんは冗談半分でしょう、そら幽霊が取り付くぞと言つて、

その草をわたくしの胸へ押し込んだのです。暑い時分で、ひとえも単

衣のの胸をはだけていたので、ぬれている藻がふところに滑り込

んで、乳のあたりにぬらりとねばり付くと、わたくしは冷たいの

と気味が悪いのどぞつとしました。市野さんは面白そうに笑つ

ていましたが、悪いたずらにも程があると思つて、わたくしは腹

が立つてなりませんでした。市野さんが帰ったあとで、わたくし

は腹の立つのを通り越して、急に悲しくなつて来て、床几に腰を

かけたまま涙ぐんでいると、外から帰つて来た母が見つけて、ど

うして泣いている、誰かと喧嘩をしたのかとしきりに訊きましたけれども、わたくしはなんにも言いませんでした。それはまあそれですんでしまったんですが、わたくしはどうも気になってなりません。幽霊藻が女の肌に触れると、きつとその女に祟るということを考えると、おそろしいような悲しいような……。いつそ早くそれを母や兄にでも打明けてしまった方がよかつたんでしようが、それを言うのさえ何だか怖いような気がしたもんですから、誰にも言わないでひとり考えているだけでした。

あとでそれを市野さんに話しますと、それはお前の神経のせいだと笑っていましたけれど、その晩わたくしは怖い夢をみたんです。わたくしの寝ている枕もとへ、白い着物をきて紫の袴をはい

た美しい官女が坐つて、わたくしの寝顔をじつと覗いているので、わたくしは声も出せないほどに怖くなつて、一生懸命に蒲団にしがみ付いているかと思うと眼がさめて、頸くびのまわりから身体じゅうが汗びっしょりになつていました。あくる朝はなんだか頭が重くつて、からだほてが熱るようで、なんとも言えないような忌いやな気持ちでしたが、別に寝るほどのことでもないのです、やつぱり我慢して店に出ていました。さあ、それからお話なんです。よく聞いてください。」

わかい女が幽霊藻の伝説に囚われて、そんな夢に襲おそわれたといふのは、不思議のようで不思議でない。むしろ当り前の事かも知れないと、僕は思った。しかしそれからこの事件がどう発展する

かということに興味をひかれて、僕も熱心に耳をかたむけていると、女はひと息ついてまた語り出した。

「ところが、どういうわけか知りませんが、きょうに限って市野さんの来るのが待たれるような気がしてならないんです。逢つてきのうの恨みを言おうというわけでもなく、ただ何となしに市野さんが待たれるような気がする。それがなぜだか自分にもよく判らないんですが、なにしろ市野さんが早く来ればいいと思つていると、その日はとうとう見えませんでした。わたくしはなんだか焦^しらされているような気がして、妙にいらいらして、その晩はおちおち寝付かれなかつたもんですから、そのあしたになると、頭がなおさら重いような、そのくせにやっぱりいらいらして、きよ

うも市野さんの来るのを待っていたんです。すると、その日も市野さんは来てくれないので、わたくしはいよいよ焦れつたくなつて、いても立ってもいられないような心持になってしまいました。

今考えると、まったく夢のようです。日が暮れて行ぎょうずい水を使

つて、夕御飯をたべてしまつて、店の先にぼんやり突つ立っているうちに、ふと胸に浮かんだのは、もしや市野さんが夜釣りに来ていやあしないかということで、おととい来たときにどうも近頃は暑いから当分は夜釣りにしようかと言つていたから、もしや今頃出かけて来ているかも知れない。そう思うと糸に引かれたように、わたくしは急にふらふらと歩き出して、川の堤の上まで行つてみると、その晩も今夜のように真つ暗で、たった一人、芒のな

かに小さい提灯をつけている夜釣りの人がみえたので、そつと抜ぬきあし足をして近寄ってみると、それはまるで人ちがいのお爺さんなので、わたくしは無暗に腹が立って、いつそ石でもほうり込んで驚かしてやろうかとも思っただくらいでした。

仕方がないから、またぼんやりと引っ返してくると、堤のなかほどでまたひとつの火がみえました。今度のは巡査が持っているような角かくとう燈で、だんだんに両方が近寄ると、片手にその火を持って、片手は長い釣竿を持っているのは……。たしかに市野さんだと判ったときに、わたくしは夢中で駈けて行って、だしぬけに市野さんに抱きついて、その胸のあたりに顔を押し付けて、子供のようにしくしく泣き出しました。なぜ泣いたのか、それは自分

にも判りません。唯なんだか悲しいような気持になつたんです。」

「その晩おそくなつて、わたくしは家へ歸りました。」と、女は言つた。「今頃までどこを遊びあるいていたと、母や兄から叱られました。わたくしはなんにも言いませんでした。とても正直に言えることじゃあないからです。それから一日置き、二日おきぐらいに、日が暮れてから川端へ忍んで行きますと、いつでも約束通りに市野さんが来ていました。こうして、たびたび逢つて、うちに、母や兄がわたくしの夜遊びをやかましく言い出して、一体どこへ出かけて行くのだと詮議するので、しよせん自分の家には思ふように逢うことが出来ないから、いつそ何処へか奉公に出ようと思つたんですが、それも母や兄が承知してくれない

ので、市野さんと相談の上でわたくしはとうとう無断で家を飛び出してしまいました。

といって、市野さんもまだ親がかりの身の上で、わたくしを引取ってくれるというわけにもいかないのは判り切っていますから、そのときに三十円ばかりのお金を受取ったんですが、世話をしてくれた人の礼金に十円ほど取られて、残りの二十円を市野さんとわたくしとで二つ分けにしました。初めの約束では少なくとも月に五、六度ぐらいは逢いに来てくれるはずでしたが、市野さんは大嘘つきで、その後ただの一度も顔をみせないという始末。おまけにその茶屋というのが料理は付けたりで、まるで淫売宿みたいな家うちですから、その辛いことお話になりません。ひと思いに死んで

しまおうと思ったこともありましたが、やっぱり市野さんに未練があるのです、そのうちには来てくれるかと、頼みにもならないことを頼みにして、ともかくもあくる年の三月ごろまで辛抱していると、家の方からは警察へ捜索願いを出したもんですから、とうとうわたくしの居どころが知れてしまって、兄がすぐに奉公先へたずねて来て、わたくしを連れて帰ってくれました。

それでわたくしも辛い奉公が助かり、恋しい市野さんの家のそばへ帰ることも出来ると思つて、一旦はよろこんでいたんですが、帰つてみるとどうでしょう。わたくしのいないあいだに市野さんは自分の家を出て、福岡とかの薬学校へはいつてしまったということ、わたくしも実にかっかりしました。そんならせめて郵便

の一本もよこして、こうこういうわけで遠方へ行くぐらいのことは知らしてくれてもいいじやありませんか。ずいぶん薄情な人もあるものだど、わたくしも呆れてしまう程に腹が立ちました。なんぼこつちが小娘だからといって、あんまり人を馬鹿にしていると、ほんとうにくやくしくつてなりませんでした、ねえ、あなた、無理もないでしょう。」

少女をもてあそんで、さらにそれをあいまい茶屋へ売り飛ばして、素知らぬ顔で遠いところへ立去ってしまうなどは、まったく怪^けしからぬことに相違ない。市野にそんな古疵のあることを僕は今までちつとも知らなかったが、彼の所業に対してこの女が憤慨するのは無理もないと思った。

「市野はそんなことをやったんですか、おどろきましたね。まったく不都合です。」と、僕も同感するように言った。

「わたくしもその時には実にくやしかったんです。けれども、家へ帰って十日半月と落ち着いているうちにわたくしの気もだんだんに落ち着いて来て、あんな男にだまされたのは自分の浅慮あさはかから起つたことで、今更なんと思つても仕様がなない。あんな男のことは思い切つて、これから自分の家でおとなしく働きましょうと、すっかり料簡を入れかえて、以前の通りに店の手伝いをしていると、ある晩のことです。わたくしはまた怖い夢をみたんです。

ちようど去年の夢と同じように、白い着物をきて紫の袴をはいた官女がわたくしの枕もとへ来て、寝顔をじつとのぞいている。

その夢がさめると汗びっしりになっている。そのあしたは頭が重い。すべて前の時とおなじことで、自分でも不思議なくらいに市野さんが恋しくなりました。一旦思い切った人がどうしてまたそんなに恋しくなったのか、自分にもその理屈は判らないんですが、ただむやみに恋しくなつて、もう矢も楯もたまらなくなつてとうとう福岡まで市野さんをたずねて行く気になつたんです。飛んだ朝顔ですね。そこで、あと先の分別もなしに町の停車場まで駆けつけましたが、さて気がついてみると汽車賃がない。今さら途方にくれてうろうろしていると、そこに居あわせた商人あきんど風の男がわたくしに馴れなれしく声をかけて、いろいろのことを親切そうに訊きますので、苦勞はしてもまだ十五のわたくしですから、

うっかり相手に釣り込まれて、これから福岡まで行きたいのだが
汽車賃をわすれて来たという話をする、その男はひどく気の毒
そうな顔をして、それは定めてお困りだろう。実はわたしも福岡
まで行くのだから、一緒に切符を買ってあげようと言って、わた
くしを汽車に乗せてくれました。

わたくしは馬鹿ですからいい気になって連れられて行くと、汽
車がある停車場に停まって、その男がここで降りるのだという。
福岡にしては何だか近過ぎるようだと思いつながら、そのまま一緒
に汽車を出ると、男は人力車を呼んで来て、わたくしを町はずれ
の薄暗い料理屋へ連れ込みました。

去年の覚えがあるので、あつと思いましたがもう仕方がありま

せん。福岡というのは嘘で、福岡まではまだ半分も行かない途中の小さい町で、ここも案の通りのあいまい茶屋でした。おどろいて逃げ出そうとすると、そんなら汽車賃と車代を返して行けという。どうにもこうにも仕様がなかったので、とうとうまたここで辛い奉公をすることになってしまいました。それでもあんまり辛いので、三月ほど経ってから兄のところへ知らせやると、兄がまたすぐに迎いに来てくれました。」

女の話はなかなか長いが、おなじようなことを幾度も繰返すのもうるさいから、かいつまんでその筋道を紹介すると、女は再び故郷の村へ帰って、今度こそは辛抱する気で落ちついていて、また例の官女が枕もとへ出てくる。そうすると無暗に市野が恋し

くなる。我慢が仕切れなくなつてまた飛び出すと、途中でまた悪い奴に出逢つて、暗い魔窟へ投げ込まれる。そういうことがたび重なつて、しまいには兄の方でも尋ねて来ない。こつちからも便りをしない。音信不通で幾年を送るあいだに、女は流れ流れて門司の芸妓になつた。

あいまい茶屋の女が、ともかくも芸妓になつたのだから、彼女としては幾らか浮かび上がったわけだが、そのうちに彼女は悪い病にかかった。一種の軽い花柳病だと思つているうちに、だんだんにそれが重つてくるらしいので、抱え主もかれに勧め、彼女自身もそう思つて、久しぶりで兄のところへ便りをする、兄の良次はまた迎いに来てくれた。そうして抱え主も承知の上で、ひ

とまず実家へ帰って養生することになって、七月の十二日に六年ぶりで故郷に近い停車場に着いた。

僕とおなじ馬車に乗込んだのはその時のことで、それは前にも言つた通りだ。

五

その後のことについて、おむつという女はこう説明した。

「御存じの通り、途中で馬車の馬が倒れて、あなた方がその介抱をしているうちに、わたくしはどこへか姿を隠してしまいました。が、あれは初めから企たくんだことでも何でもないので、わたくしは

勿論、兄と一緒に帰るつもりだったんです。ところが、途中まで来ると、路ばたの百姓家に腰をかけて何か話している人がある。それが確かに市野さんに相違ないんです。十四のときに別れたぎりですけれど、わたくしの方じゃあ決して忘れやあしません。馬車の窓からそれを見て、わたくしがはっと思う途端に、まあ不思議ですね、馬車の馬が急に膝を折って倒れてしまいました。

それからみんなが騒いでいるうちに、わたくしはそつと抜けて行って、だしぬけに市野さんの前に顔を出すと、こつちの姿がまるで変っているの、男の方じゃあすぐには判らなかつたらしいんですが、それでもようように気がついて、これは久し振りだということになりました。けれども、こんなところを兄に見付けら

れてはいけないというので、市野さんはわたくしを引つ張つて、その家の裏手の方へまわると、そこには唐もろこしの畑があるの
で、その唐もろこしの蔭にかくれてしばらく立ち話をしているう
ちに、馬の方の型が付いて、あなたと兄は歩き出したので、それ
をやり過ぎて、わたくし共はあとからゆつくり帰つて来たんで
す。

その途中で、市野さんといろいろ話し合いましたが、あの人は
その後に薬学校を卒業して、薬剤師の免状を取つて、自分の家へ
帰つて立派に商売をしているそうで、昔の事をひどく後悔してい
ると言つて、しきりに言い訳をしたり、あやまつたりするので、
過ぎ去つたことを今さら執念ぶかく言つても仕方がないと思つて、

わたくしももう堪忍してやることにしました。市野さんはわたくしの病気を気の毒がって、それも昔にさかのぼればやっぱり自分から起ったことだと言って、わたくしが家へ帰っているあいだは幾らかの小遣いを送ってくれるように言っていました。

それでその時は無事に別れて、わたくしは兄よりもひと足おくれで家へ帰りましたが、わたくしの病気は重いといっても、ずっと寝ているようなわけでもないので、あくる朝、久し振りに川の堤へあがって、芒のなかをぶらぶら歩いていると、足もとに近い水の上に薄^{うすじろ}白と薄むらさきの小さい花がぼんやりと浮いて流れているのが眼につきました。幽霊藻が相変らず咲いていると思うと、不思議にそれが懐かしいような気になって、そこらに落ちて

いる木の枝を拾って、その藻をすくいあげて、まあどういふ料簡でしょう、その濡れた草を自分のふところへ押し込んだのです。

ちようど七年前に、市野さんがわたくしの懐ろへ押し込んだように……。その濡れて冷たいのが、きようは肌にひやりとして、ひどくいい心持なので、わたくしは着物の上から暫くしつかりと抱きしめているうちに、また急に市野さんが恋しくなつて来しました。

前にも申す通り、わたくしは所々方々を流れ渡っている間、一度も市野さんに逢つたこともなく、今度帰つて来たからといって再び撚よりを戻そうなぞという料簡はなかつたんですが、この幽霊藻を抱いているうちに、又むらむらと気が變つて、すぐに町まで行きました。そうして、市野さんを表へ呼び出すと、市野さんは

迷惑そうな顔をして出て来まして、お前のような女がたずねて来ては、両親の手前、近所の手前、わたしが甚だ困るから、用があるなら私の方から出かけて行くと言うんです。では、今夜の七時ごろまでに尾花川の堤まで来てくれと約束して別れて、その時刻に行ってみますと、約束通りに市野さんは来ていました。向うではわたくしがお金の催促にでも行ったと思つたらしく、当座の小遣いにしろといつて十五円くれましたので、わたくしはそれを押し戻して、お金なんぞは一文もいらぬから、どうぞ元々通りになつてくれと言いますと、市野さんはいよいよ迷惑そうな顔をして、なんともはつきりした返事をして聞かせないんです。

それでその晩はうやむやに別れてしまつたんですが、わたくし

の方ではどうしても諦められないので、一日置きに町の病院まで通つて行くのを幸いに、その都度きつと市野さんの店へたずねて行つて、男を表へよび出して、どうしても元々通りになつてくれるさく責めるので、市野さんもよくよく持て余したとみえて、今夜も尾花川の堤へ来て、いよいよ何とか相談をきめるといふことになりました。

日の暮れるのを待ちかねて、わたくしは堤の芒をかきわけて行くと、あなたが先に来て釣りをしておいでなさる。そこがいつも市野さんと逢う場所なので、よんどころなく芒のかげにかくれて、市野さんの来るのを待っていると、やがてやって来て、しばらくあなたと話しているので、わたくしも焦れつたくなつて芒のかげ

から顔を出すと、市野さんも気がついて、いい加減にあなたに挨拶して別れて、わたくしと一緒に川下の方へ行くことになりました。

市野さんはお前がそれほど言うならば、元々通りになつてもいい。いつそ両親にわけを話して、表向きに結婚してもいい。しかし今のように病院通いの身の上では困る。まずその悪い病気を癒してしまった上でなければ、どうにもならない。ついては、おまえの病毒は普通の注射ぐらいでは癒らない。わたしが多年研究している秘密の薬剤があつて、それを飲めばきつと癒るから、ふた月ほども続けて飲んでくれないかと言うんです。

わたくしはすぐに承知して、ええ、そんな薬があるならば飲み

ましようと言うと、市野さんは袂から小さい粉薬こなぐすりの壘を出して、これは秘密の薬だから決して人に見せてはいけない、飲んでしまつたら空壇を川のなかへほうり込んでしまえという。その様子がなんだか怪しいので、わたくしは片手で男の袖をしつかり掴んで、あなた、ほんとうにこの薬を飲んでもいいんですかと念を押すと、市野さんはすこしふるえ声になつて、なぜそんなことを訊くのだと言いますから、わたくしは掴んでいる男の袖を強く引つ張つて、あなた、これは毒薬でしょうと言うと、市野さんはいよいよ慄ふるえ出して、もうなんにも口が利けないんです。

今夜こそは最後の談判で、相手の返事次第でこつちにも覚悟があると、わたくしは家を出るときから帯のあいだに剃刀を忍ばせ

ていましたので、畜生とただひとこと言ったばかりで、いきなりにその剃刀で男の頸筋から喉へかけて力まかせに斬り付けると、相手はなんにも言わずに、ぐったりと倒れてしまいました。それでもまだ不安心ですから、そのからだを押し転がして、川のなかへ突き落して置いて、自分もあとから続いて飛び込もうと思いましたが、また急に考え直して、町の警察へ自首するつもりで暗い路をひとりで行く途中、ちようどあなたにお目にかかったんです。飛んだ道連れになって、さだめし御迷惑でございましたが、実は警察がどの辺にあるか存じませんので、あなたに御案内を願いたいのでございます。」

女の話はまずこれで終った。

實際、僕も迷惑を感じないでもなかったが、さりとて冷やかに拒絶するにも忍びないような気がしたので、素直に承知して警察まで一緒に行くことになった。その途中で女は又こんなことを言った。

「ゆうべも、いつもの官女が枕もとへ来ました。」

水中の幽鬼の影が女のうしろに付き纏っているようにも思われ、気の弱い僕はまたぞつとした。

尾花川堤の人殺しは、狭い町の大評判になった。殊にその加害者が芸妓というのだから、その噂はいよいよ高くなった。その当夜、現場で被害者に出逢ったのは僕ひとりで、また一方には加害者を警察まで送って来た関係もあるので、僕は唯一ゆいいつの参考人と

して警察へも幾たびか呼び出された。予審判事の取調べも受けた。そんなわけで、九月の学期が始まる頃になつても、僕は上京を延引しなければならぬことになつた。

十月になつて、僕はいよいよ上京したが、彼女の裁判はまだ決定しなかつた。あとで聞くと、あくる年の四月になつて、刑の執行猶予を申渡されて、無事に出獄したそうだ。裁判所の方でもいろいろの情状を酌量されたらしい。

しかし彼女は無事ではなかつた。家へ帰るころには例の病いがかだんだん重くなつて、それからふた月ほどもどつと床に着いていたが、六月末の雨のふる晩に寢床を這い出して、尾花川の堤から身を投げてしまつた。人殺しの罪を償^{つく}うためか、それとも病苦に

堪えないためか、それらを説明するような書置なども残してなかった。

あくる日、その死体は川しもで発見されたが、ここに伝説信仰者のたましいをおびやかしたことがある。その死体にはかの幽霊藻が一面にからみ付いて、さながら網にかかった魚のように見えたとのことだ。

青空文庫情報

底本：「異妖の怪談集 岡本綺堂伝奇小説集 其ノ二」原書房

1999（平成11）年7月2日第1刷

初出：「講談俱樂部」

1924（大正13）年9月

入力：網迫、土屋隆

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

水鬼

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>